

日本学術
会議

北海道地区会議ニュース

発行 日本学術会議北海道地区会議

No. 48

2018-3



第24期北海道地区会議代表幹事
(北海道大学副学長・病院長)

寶金 清博

今回、日本学術会議北海道地区会議第24期(2017.10-2020.9)の代表幹事を拝命いたしました。北海道地区の科学者の情報交換と地域社会と科学者の交流の場としての本地区会議の使命を果たせるよう、微力ではありますが、努力いたします。皆様のご指導とご協力をよろしくお願い申し上げます。

日本学術会議は、ご存知のように、「科学者の国会」とも言われております。日本学術会議法によって定められ、国費によって運営される会議体です。第二次世界大戦後、国民の幸福に資する科学のあり方を実現するため、1949年に設立されております。現在は、内閣府のもとに設置されており、210名の会員は、内閣総理大臣によって任命されます。第一部が人文・社会科学、第二部が生命科学、第三部が理学・工学系に分類され、それぞれ、70名の会員により構成されております。これに加えて、約2000名の連携会員によって広く日本の科学・学術と連携しております。日本の科学者は、政府の調査では84万人前後と言われ、その数は、専門職としては、大きな数に達しております。例えば、日本の看護師数154万人、日本の医師数29万人、弁護士数4万人弱と比較しても、決して少ないものではありません。このため、実に多くの学術団体(学会)などが存在しております。

しかしながら、全体としてまとまった組織としての活動は、必ずしも十分ではなく、これを実現するため会議体として、日本学術会議が組織されています。その目的は、

- ①科学に関する重要事項を審議し、その実現をはかること、
 - ②科学に関する研究の連絡を図り、その能率を向上させること、
- とされています。

①については、日本学術会議の創設期から現在に至るまで、実に多くの重要な事項を審議し、声明や提言などを発出して参りました。科学に対する社会の期待はますます大きくなる一方で、科学が持つ責任も大きなものになっております。また、個々の科学の領域では、対応できない難題も増えており、今後も重い使命を背負ってゆくことになると思います。

また、②については、情報通信技術の爆発的普及により、連絡の精度や効率と言う点では、日本学術会議の設立当時とは比べものにならない高いレベルに達しています。しかし、一方で、科学の細分化と学際的分野の成長、あるいは、これまでのカテゴリーには入らない新しい科学分野の登場などがあり、科学者同士の連携は、むしろ困難な状況も生まれております。

一方で、日本学術会議は、多彩な一線の科学者の会議体であり、連携会員も含めると、2200人以上に達する巨大な組織であり、その機動性は必ずしも高いものではありません。「科学者の国会」として、84万人に達する科学者間の連携のための十分な機会提供ができていたとは思えません。また、地域住民・国民への情報提供の機会提供も不十分であると言わざるを得ません。実際、日本学術会議の認知度は、科学者の間ですら不十分なものです。まして、一般国民の認識は極めて希薄なものです。

この問題に対応するため、日本学術会議では、7つの地区会議を設け、地域に密着した活動を展開しております。北海道地区会議もその一つであります。北海道地区会議は、6名の会員と57名の連携会員から構成されております。この中から、12名の科学者の

方をお願いして、運営協議会を組織しております。

地区会議は、地域住民への広報活動を行うことと、北海道地区の多様な領域の科学者の連携を実現するために、これまで同様に、市民公開学術講演会とサイエンスカフェを行って参ります。

市民公開学術講演会は、これまでも、科学者が、市民と共に考えるべき重要なテーマを取り上げてきました。昨年は、国連が提示した持続可能な開発目標Sustainable Development Goals (SDGs) を環境科学と教育の面から取り上げ、札幌市、旭川市で、市民と共に考える機会を持ちました。本年度は、条件が許せば、開催回数を増やして、より多くの広範囲な市民の方々に対して、日本学術会議の活動や最新の科学の話題を提供したいと思っております。サイエンスカフェでは、科学に深い興味を持つ方々と、熱い議論を交わす場を提供します。特に、文理融合と言われる領域を取り上げ、自然科学と人文科学が接触して、化学反応するようなホットな議論の場となるように、テーマを設定したいと思っております。会員、連携会員の皆様のご協力とご支援をよろしくお願いいたします。



第23期北海道地区会議代表幹事
(北海道大学名誉教授)

上田 一郎

北海道大学地区会議の代表幹事として、2014年（平成26年）10月から2017年9月まで、北海道地区の科学者間ネットワークの構築とわが国の学術成果の公開を二つの大きな柱として活動して参りました。

北海道地区の会員・連携会員皆さまの熱心な活動に支えられ、また北海道のみならず全国の科学者に協力して頂いて、この3年間で、素晴らしい市民公開学術講演会を札幌で3回開催する事が出来ました。いずれも多くの市民の方と科学者に参加頂き、活発な討論がおこなわれました。2014年11月には、「高齢化社会の食と医療～心身の健康のために～」と題して本間さんと会員を中心に企画していただきました。向井千秋氏（日本学術会議副会長）、安田和則氏（北海道大学理事・副学長）の開会挨拶の後、浅

香正博氏（北海道大学大学院医学研究科特任教授）、玉腰暁子氏（北海道大学大学院医学研究科教授）、内山真氏（日本大学医学部教授）、下濱俊氏（札幌医科大学医学部教授）といった現在ご活躍の先生に講演いただきました。健康に高齢期を迎えるためには日々の生活をどのように過ごすべきか、また認知症をはじめとする高齢者の心身の諸問題とその対策について紹介いただき、140名近くが参加しました。この講演会の内容をもとにして、その後学術の動向に特集を組み、「高齢化社会の食と医療－心身の健康のために－」（2015年6月号）として公表・発信しました。2015年11月15日には、仲真紀子会員を中心に企画していただき、「貧困と人の育ち－人文社会科学からの挑戦－」を開催しました。上田が開会挨拶を行い、大西隆氏（日本学術会議会長）に都市計画の立場から関連の講演を頂いた後、内田伸子氏（十文字学園女子大学理事・特任教授）、松島京氏（近大姫路大学教育学部准教授）、松本伊智朗氏（北海道大学大学院教育学研究院教授）、間宮正幸氏（北海道大学大学院教育学研究院特任教授）に講演していただきました。出産、育児、教育、就労といった人々の成長に、貧困が及ぼす影響をはじめ、問題点や支援策などについて、心理学や社会学領域からのエビデンスを踏まえたご講演をいただき、約160名の参加者がありました。2017年2月には、山中康裕連携会員を中心に企画していただき、「持続可能な世界にむけて、国連が採択した目標（SDGs）に貢献する北海道の知」を開催しました。まず上田が開会の挨拶を行い、大西隆氏（日本学術会議会長）に、学術会議による持続可能な世界に向けた取り組みを紹介していただきました。その後、船水尚行氏（北海道大学大学院工学研究院教授）、山内太郎氏（北海道大学大学院保健科学研究院教授）、森傑氏（北海道大学大学院工学研究院教授）、金子正美氏（酪農学園大学農食環境学群環境共生学類教授）によって、北海道の研究者が実践している持続可能な社会を目指した活発な取り組みを紹介していただきました。約100名が参加し、活発な討論が行われました。

2015年8月には、日本学術会議第2部の委員会を北海道大学で開催しました。これに合わせて、第2部生物部会と北海道地区が主催となって、公開学術講演会「感染症との闘い」を北海道大学で開催しました。大西隆氏（日本学術会議会長）、山口佳三氏（北海道大学総長）の開会挨拶の後、喜田宏氏（北

北海道大学人獣共通感染症リサーチセンター特任教授)、甲斐知恵子氏(東京大学医科学研究所教授)、西條政幸氏(国立感染症研究所ウイルス第一部部長)、高田礼人氏(北海道大学人獣共通感染症リサーチセンター教授)、石黒信久氏(北海道大学病院感染制御部長)といった現在第一線でご活躍の先生に講演いただき、感染症に対する理解を深めました。149名の参加があり、盛況のうちに終了しました。

また23期も、前期と同様にサイエンスカフェを、

北海道大学高等教育推進機構高等教育研究部科学技術コミュニケーション教育研究部門と三省堂書店札幌店と共催して、毎年一回行うことができました。

以上、地区の重要な活動として、学術成果の市民への還元や、科学者と市民の対話を行うことができたと思っています。これは、北海道地区の会員・連携会員の先生と北海道地区会議事務局の皆さんの熱心な活動と支援に支えられてできたことです。最後に皆さまに御礼申し上げます。

学術講演会開催報告

北海道地区会議では、市民公開の講演会を毎年開催しています。平成29年度は、11月12日(日)に開催し、学生、大学関係者、行政関係者、一般市民等多数の方にご参加いただき、盛況のうちに終了しました。以下に当日の講演内容を報告します。

「第17回北海道地区会議学術講演会 持続可能な世界に向けて、国連が採択 した目標(SDGs)と教育」

日時：平成29年11月12日(日) 13:30~17:00

場所：北海道教育大学旭川校講義棟L棟・L301教室

報告：北海道地区会議運営協議会委員
(北海道教育大学名誉教授)

氷見山 幸 夫

はじめに

日本学術会議北海道地区会議は2017年2月11日、北海道大学と共催で、国連が定めた「持続可能な開発目標(Sustainable Development Goals, SDGs)」に対する北海道における取り組みをテーマとした講演会を実施した。そこではSDGsの概要、SDGsへの貢献として北海道地区の高等教育機関が行っている世界各地及び道内での様々な活動の状況が紹介され、持続可能な開発についての関心と認識を大いに高めることができた。

そこで平成29年度は、場所を札幌市から北海道第二の都市旭川市に移し、昨年度取り上げられなかった開発目標4「質の高い教育をみんなに」をはじめとする教育に関係するいくつかの目標に焦点を当

て、北海道におけるSDGsに対する社会の関心と認識の更なる向上を目指した。なおテーマの性格上、北海道教育大学との共催とし、当該テーマで研究実績が豊富な宮城教育大学からも講師を招いて実施した。

当日は50余名の参加者があった。講演会は、三成美保日本学術会議副会長・奈良女子大学副学長の開会挨拶で始まった。三成氏は前月に学術会議副会長に就任されたばかりで、これが副会長として公の場で行なう初仕事とのことであった。それだけに、学術会議の役割や課題について、とりわけジェンダーの観点から、大変力の入ったお話をいただいた。次に阿部修北海道教育大学理事・副学長に会場大学を代表して歓迎の挨拶をいただいた。それに引き続いて以下の4件の講演が行なわれた。

講演1「SDGsと学校教育」

氷見山幸夫(北海道教育大学名誉教授)

講演2「ジオパーク活動と地域の自然・歴史教育の重要性」

和田 恵治(北海道教育大学教育学部教授)

講演3「SDGsとユネスコスクール」

小金澤 孝昭(宮城教育大学名誉教授)

講演4「サブサハラ諸国における教育と子ども」

大津 和子(北海道教育大学名誉教授)

以上の講演については、それに引き続いて行なわれた総合討論・質疑応答とともに、次節以降にその概要を紹介する。

講演会は寶金清博日本学術会議北海道地区会議代表幹事(日本学術会議会員、北海道大学副学長、北海道大学病院院長)の開会挨拶をもって盛会裏に終了した。

日本学術会議北海道地区会議学術講演会



目標【SDGs】と教育

持続可能な世界にむけて
国連が採択したSDGsと教育

入場無料
どなたでも参加できます*



日本学術会議北海道地区会議は2017年2月11日(北海道大学)と共に、国連が定めた「持続可能な開発目標」(Sustainable Development Goals, SDGs)に対する北海道における取り組みをテーマとした座談会を実施しました。そこででは SDGs の概観、SDGsへの言及として北海道大学の食育教育機関が行っているさまざまな施設及び市内での様々な活動の状況が紹介され、持続可能な開発のための関心と認識を大に高めることができました。そして今年度は会場を札幌市東区4「賢い・教育をみんなに」として関連するいくつかの施設に息点を当て、北海道というSDGsに対する会の関心と認識の更なる向上を目指します。なおテーマで研究発表が豊富な盲学校や大学からも講義を受けて実施します。参加費無料でどなたとも参加しますので、お気軽においでください。



プログラム	
12:30~13:40	開会 司会 奥田 知寿子 (日本学術会議北海道地区、旭川女子大学准教授)
13:40~13:45	挨拶 奥田 知寿子 (北海道教育大学理事、中野 隆雄)
12:45~14:15	奥田 知寿子 氏長(旭川女子大学准教授)
14:15~14:45	北海道教育大学旭川校 講義棟(L棟)1301教室 (旭川市北町2丁目)
14:45~15:00	開会 司会 奥田 知寿子 (日本学術会議北海道地区、旭川女子大学准教授)
15:00~15:30	開会 司会 奥田 知寿子 (日本学術会議北海道地区、旭川女子大学准教授)
15:30~16:00	開会 司会 奥田 知寿子 (日本学術会議北海道地区、旭川女子大学准教授)
16:00~16:10	開会 司会 奥田 知寿子 (日本学術会議北海道地区、旭川女子大学准教授)
16:10~16:50	開会 司会 奥田 知寿子 (日本学術会議北海道地区、旭川女子大学准教授)
16:50~17:00	閉会 司会 奥田 知寿子 (日本学術会議北海道地区、旭川女子大学准教授)

主 催 日本学術会議北海道地区会議

共 催 北海道教育大学

当日申込、お問い合わせ先 日本学術会議北海道地区会議事務局 北海道大学 旭川校庶務課 研究開発企画課

TEL:011-706-2155 / 2166 FAX:011-706-4873 e-mail:sushin@engeni.hokudai.ac.jp

電話 FAX 又は送付用メールで11月6日(月)までに上記へお申し込み下さい。(当日受付可)



開会挨拶をされる三成日本学術会議副会長

講演 1 「SDGsと学校教育」

(日本学術会議連携会員，北海道教育大学名誉教授)

氷見山 幸夫

持続可能な世界の実現に向けて国連が2015年に定めた「持続可能な開発目標（Sustainable Development Goals, SDGs）」は、世界が取り組むべき17の目標とそれらを具体化した169のターゲット（達成基準）を提示している。それらへの取り組みは決して容易ではないが、我が国でも官・学・民における取り組みが徐々に加速している。そのような中、未来を担う児童生徒が集う学校教育においても、SDGs

に取り組む体制の構築が急がれている。

まずSDGsで注目すべきことは、世界に数多ある持続可能性に関わる複雑な課題をうまく整理し、平易に示していることである。持続可能な世界を目指す誰もが、17の目標のうち少なくとも1つは、関心のある目標を見つけることができると思われる。そこから徐々に視界が広がり、他の目標にも関心が向き、また異なる目標間の軋轢などにも気付き、持続可能性に関する諸課題への包括的理解と取り組みに繋がってゆくことが期待される。

次に、我々の周りにはSDGsに貢献するであろう活動や実践が少なからずあるはずだということを強調したい。いくつか例を挙げると、

・北海道教育大学の「外国地誌」の授業で中国の土地利用と砂漠化・土壌劣化を取り上げたが、これは目標15「陸の豊かさを守る」に直結する。教育大学の授業でSDGsを取り上げることは、将来小中高の教員になる学生への影響だけでなく、教える大学教員自身への影響も大きい。

北海道教育大学を拠点とする「環境地図教育研究会」の活動をSDGsの視点で見ると・・・

環境地図教育研究会

The Society for Environmental Map Education (SEME)

北海道旭川市を中心とした環境地図作品展の開催をはじめ、環境と地図に関する「教育・研究活動」をしている団体です。

ESSE is an educational research center at Hokkaido City Univ., which aims at promoting education and research related with environment and map.


[ホーム](#)
Back to Top


[研究について](#)
About us


[活動内容](#)
Activities


[組織](#)
Organization


[リンク](#)
Links


[お問い合わせ](#)
Inquiry



KCU - COE 専任員

第27回

私たちの身のまわりの環境地図作品展

27th ASASHIMA COLLEGE'S ENVIRONMENTAL MAP WORK SHOP

「環境地図」の制作を通して、環境と地図の関係を学ぶ機会を創出する。

作品大募集

「環境地図」の制作を通して、環境と地図の関係を学ぶ機会を創出する。

→ 応募方法について

How to apply

→ 環境地図作品とは?

What's content?

→ 2016年度の実賞作品

2016 prize winner

→ 過去の受賞作品

Prize winners of previous years

みんなの環境地図ワークショップ第17回

2017 ASASHIMA COLLEGE'S ENVIRONMENTAL MAP WORK SHOP

2017/10/29(SUN) 9:00-13:30 旭川市立旭川第二中学校 旭川市立旭川第二中学校 旭川市立旭川第二中学校

新着ニュース News

→ ニュース News

(環境地図教育研究会ホームページより)

・旭川を拠点として毎年全国規模で行なわれている「私たちの身のまわりの環境地図作品展」は持続可能性教育や大学のアウトリーチの側面も有し、目標4「質の高い教育をみんなに」に深く関わる内容を包含している。

・日本学術会議は学術フォーラム「中高生と考える『Future Earth』と学校教育」(平成29年9月)や提言『持続可能な社会づくりに向けた地理教育の充実』等の中で、SDGsへの取り組みに深く言及している。それらは学術会議のホームページから容易に入手できるので、活用が期待される。



事例紹介をする氷見山北海道教育大学名誉教授

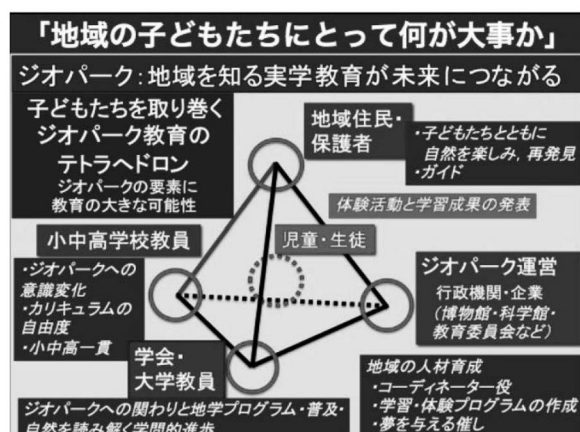
講演2 「ジオパーク活動と地域の自然・歴史教育の重要性」

(北海道教育大学教育学部教授)

和田 恵 治

北海道には1つの世界自然遺産、6つの国立公園、それに2つの世界ジオパークと4つの日本ジオパークがあり、ジオパークは地域の貴重な地質・自然遺産を保護しつつ、それを観光・教育資源として活用し、地域振興や防災に活かすことができる。

そこで和田教授はまず、「日本のジオパーク（世界ジオパーク認定8地域、日本ジオパーク認定35地域）」、「北海道の自然公園」,「ジオパークの原点が地域の風土にあること」,「小中学校の理科での位置づけ」,「学校教育にジオパークを導入するメリット」,とジオパークについて概括的な説明をした後,「カムイの大地ジオパーク構想」について、以下のよう具体的な論を展開した。



「構想エリアの地質」,「カムイの大地と火山が織りなす水と森の風土」,「旭岳溶岩末端崖からの地下水の湧出」,「2.5億年前から現代に至る大地の物語ーいかにして上川盆地ができたか、人々との関わりは?」,「神居古潭變成岩はどこでできたか?」,「ジオパークの意義」,「地域の子どもたちにとって何が大事か」

特に最後に示された「地域の子どもたちにとって何が大事か」のスライドは、この講演が目標15「陸の豊かさを守る」に深く関わるだけでなく、目標4「質の高い教育をみんなに」にも深く関わるものであることを強く示すものであった。



講演中の和田北海道教育大学教授

講演3 「SDGsとユネスコスクール(ESD)」

(宮城教育大学名誉教授)

小金澤 孝 昭

ESD（持続可能な開発のための教育）は我が国が提唱して2002年に国連総会で決議された教育プログラムであり,「持続可能な社会の創り手を育む教育」とも呼ばれる。文部科学省と日本ユネスコ国内委員会は国内に1千校余あるユネスコスクールをその推進拠点と位置づけ、支援している。また全国17の大学がユネスコスクール支援大学間ネットワークを作り、支援している。小金澤教授はそれらの大学の一つである宮城教育大学からESDの実践活動に深く携ってきた。

ESDはSDGsの17の目標すべてに関係しているため、両者をうまく関連付けることが双方の成功にとって極めて重要であり、小金澤教授の講演はその方策を自身が関係した豊富な実践事例を紹介しつつ

わかりやすく論じた。全体の構成は次の通りであった。

1) ESDって何？持続可能な社会とは？

～持続不可能な社会の課題を乗り越える！

・日本におけるESDの取り組み

＞ここで印象に残ったのは、当該地域（仙台市など）、地方（東北地方など）、日本、地球の4つの空間スケールで環境、経済、社会のもつ持続不可能な現実をリストアップし、それらを解決するための地域目標を絞り込んでいたことである。

2) 国連SDGsとは何？

＞SDGsの17のグローバル目標が示された。

3) SDGsにESDで取り組む！

①学校と地域が連携した取り組み（気仙沼地域）

②大学生のESD活動実践事例（福島県西会津町）

＞SDGsが具体的な開発目標（即ち解決すべき課題）であるが、地域により異なるので、地域に合った複数の目標とターゲットを設定する、そしてこの目標をESDという人材育成と地域ネットワークづくりによって実践する、とした。

例えば気仙沼市の地域目標は、

目標 3 すべての人に健康と福祉を

目標 4 質の高い教育をみんなに

目標 8 働き甲斐も経済成長も

目標11 住み続けられるまちづくりを

目標12 持続可能な消費と生産

目標14 海の豊かさを守ろう

とされた。

4) おわりに

SDGs（開発目標）をESDの手法（人材育成と地域ネットワークの育成）で解決し、持続可能な社会を創ろう！そのためには、みんなのお金をどう集めてどう使うかも大切です。（まずは1000兆円の借金を返しましょう！）と結んでいる。

持続不可能な現実(社会)

	仙台	東北	日本	地球
環境	ヒート・アイランド	放射能汚染	火山活動 土砂災害	地球温暖化
経済	雇用 買い物弱者	経済格差 都市・農村	国の財政 赤字	紛争・債務国
社会	高齢化・ 待機児童 地域格差	地方消滅 教育格差 福祉格差	年金問題 人口減少 少子化	紛争 難民 病気



事例紹介をする小金澤宮城教育大学名誉教授

講演4 「サブサハラ諸国における教育と子ども－SDGsとESD－」

（北海道教育大学名誉教授）

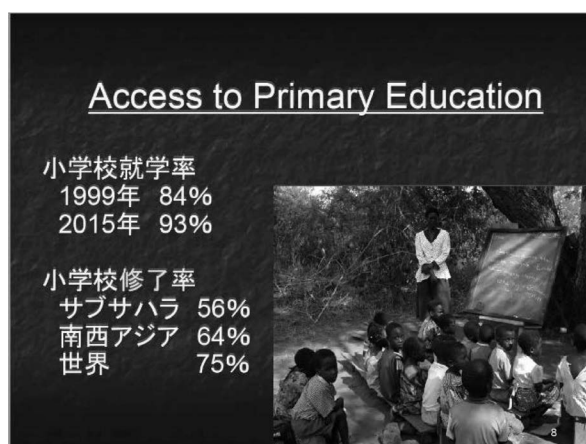
大津 和子

世界にはまだ初等教育さえも普及が遅れている地域が少なからずあるが、サハラ砂漠の南に位置するサブサハラ地域は、中でも状況が厳しい。大津教授は長く開発途上地域で調査研究を続けた経験を踏まえ、今回はこのサブサハラ地域の教育に焦点を当て、SDGs、ESDとの関連を報告した。

SDGsに先立つ2000年～2015年に実施された国連のミレニアム開発目標は開発途上国における初等教育の普及・改善に大きな成果をあげ、世界の小学校就学率は1999年の84%から2015年の93%へと向上したが、サブサハラ地域の小学校修了率は56%と、世界全体の75%や南西アジアの64%に比べても、かなり低い水準に留まっている。

SDGsの目標4「質の高い教育をみんなに」が悲痛な叫びに聞こえるこの地域の困難さの背景にジェンダー格差や教員の社会的経済的地位の低さなど様々な問題があり、それらの克服にSDGsとESDが重要な役割を果せることを大津教授は示した。

特にジェンダー格差については、女子児童・生徒が家事をするために宿題ができない、先生方（ほとんどが男性）も親もそういったことを十分理解していない、近くに学校がなく遠距離を通学することは女子にとって危険、女子用のトイレが不足している、など男性の理解が至らない要因が多々あることが示され、理系の男性科学者が主体の持続可能性論議の危うさを痛感させられた。



講演中の大津北海道教育大学名誉教授

総合討論，質疑応答

座長：氷見山 幸 夫

(日本学術会議連携会員，北海道教育大学名誉教授)

質問1：SDGs目標4「質の高い教育をみんなに」に関して，日本が抱えている問題は何で，それに対して教育者はどうすればよいのか，特に小・中学生に対して。

氷見山：問題・課題は沢山あり簡単には言えないが，日本学術会議が近年公表した「提言」や開催した「公開シンポジウム」などの中に，質問に関連するものがいくつかあるので，学術会議のホームページで確認し，是非参考にして頂きたい。特につい先日開催された公開シンポジウム「持続可能な社会づくりに向けた地理教育の充実－SDGs実現における教育の役割」は参考になると思われる。

<http://www.iknowshachu.org/scj/index.html>

小金澤：学校の先生方のコミュニケーション能力の向上も重要だと思う。



総合討論の様子

質問2：SDGsの17の目標を学校教育ですべて網羅するのは難しい。最も手薄になりそうな目標はどれで，それは教育の中でどう扱ったらよいか。

小金澤：例えば飢餓について考えるとき，日本は関係ないと思っていないだろうか。SDGsの169のターゲットを参照すれば，何か気付くかもしれない。そのようにして調べたり実践したりすることのできる人を育てることが大切なのではないか。北海道にも重視すべき問題があるはずで，要は各地域でどの目標にどう取り組むかを工夫することだと思う。

大津：問題間の繋がりを見ることも重要で，そのような意識を身につけることが学校教育に望まれる。

質問3：世界各国のいじめ事情はどうなっているか。差別・いじめ撲滅のために「人の痛みをわが痛み」とする教育に大切なことは何か。

氷見山：大きな問題で，簡単な答えは見つからないが，ESDの課題として重要だと思う。先ほど紹介した環境地図作りへの取り組みが「荒れた学校」として知られていたこの講演会場の近くの中学校の正常化に活かされたという実例がある。子どもたちが意欲をもって学べるようにすることが一つの鍵ではないか。

なお，この講演会の講演の資料は日本学術会議のホームページ

<http://www.scj.go.jp/ja/event/2017.html>

から入手できるので，是非ご活用ください。

平成29年度実施の地区事業(実施分)

○学術講演会

平成29年11月12日（日）

北海道教育大学旭川校L301教室（旭川市）

「持続可能な世界にむけて、国連が採択した目標（SDGs）と教育」

司会：氷見山 幸夫

（日本学術会議連携会員，北海道教育大学名誉教授）

◇挨拶 日本学術会議副会長，
奈良女子大学副学長 三成 美保
北海道教育大学理事・副学長
阿部 修

◇講演

「SDGsと学校教育」

日本学術会議連携会員，

北海道教育大学名誉教授 氷見山 幸夫

「ジオパーク活動と地域の自然・歴史教育の重要性」

北海道教育大学教育学部教授

和田 恵治

「SDGsとユネスコスクール」

宮城教育大学名誉教授 小金澤 孝昭

「サブサハラ諸国における教育と子ども」

北海道教育大学名誉教授 大津 和子

◇総合討論，質疑応答

座長：日本学術会議連携会員，

北海道教育大学名誉教授 氷見山 幸夫

◇挨拶 日本学術会議会員，日本学術会議北海道
地区会議代表幹事，北海道大学副学長，
北海道大学病院長 寶金 清博

○北海道地区会議サイエンスカフェ

平成30年2月9日（金）

三省堂書店札幌店（札幌市）

「先端医療はどこへ向かうのか～センスオブワンダーとセンスオブエシックスを問う～」

ゲスト：日本学術会議会員，日本学術会議北海道
地区会議代表幹事，北海道大学副学長，
北海道大学病院長 寶金 清博

○北海道地区会議運営協議会

①平成29年6月8日（金）北海道大学（札幌市）

議題1 平成29年度事業計画について

報告1 平成28年度事業実施報告について

②平成29年7月27日（木）（持ち回り）

議題1 学術講演会について

③平成30年2月26日（月）北海道大学（札幌市）

議題1 平成30年度事業計画について

議題2 平成30年度学術講演会について

○北海道地区会議科学者懇談会

平成29年11月12日（日）

北海道教育大学旭川校（旭川市）

※三成副会長を囲んで

北海道地区会議運営協議会委員紹介

第24期日本学術会議北海道地区会議の運営委員を紹介します。

氏名	石塚 真由美 (いしづか まゆみ)	第二部会員
	所属・職名	北海道大学大学院獣医学研究院・教授
	所属委員会（日本学術会議）	食料科学委員会，環境学委員会
	研究分野（研究テーマ） 毒性学（化学物質の生体内代謝と動態，化学物質感受性の動物種差の機序解明） 環境毒性学（環境化学物質のフィールド調査，毒性メカニズム）	

氏名	大野 由夏 (おおの ゆうか)	第一部会員
	所属・職名	北海道大学大学院経済学研究院・教授
	所属委員会（日本学術会議）	経済学委員会，国際委員会，北海道地区会議，ワークライフバランス分科会
	研究分野（研究テーマ） 国際貿易政策論（貿易政策がイノベーションや技術発展に与える影響の理論分析） 産業組織論（イノベーション，特許，知的財産権，競争政策，ワイン経済学）	

氏名	加藤 昌子 (かとう まさこ)	第三部会員
	所属・職名	北海道大学大学院理学研究院・教授
	所属委員会（日本学術会議）	化学委員会
	研究分野（研究テーマ） 錯体化学・光化学 ・光機能性金属錯体（発光性錯体，クロミック錯体，光増感剤）の開発と機能導出・機構解明 ・ソフトクリスタル：高秩序で柔軟な応答系の学理構築と機能開発	

氏名	但野 茂 (ただの しげる)	第三部会員
	所属・職名	独立行政法人国立高等専門学校理事 函館工業高等専門学校・学校長
	所属委員会（日本学術会議）	機械工学委員会，力学基盤工学分科会，生体医工学分科会
	研究分野（研究テーマ） 生体機械工学 筋骨格系バイオメカニクス 医療福祉機器開発 実践的工学教育	

氏名	寶金 清博 (ほうきん きよひろ)	第二部会員 (北海道地区会議代表幹事)
	所属・職名	北海道大学病院長
	所属委員会 (日本学術会議)	臨床医学委員会, 健康生活科学委員会
	研究分野 (研究テーマ) 脳神経外科 再生医療 医療安全	

氏名	吉岡 充弘 (よしおか みつひろ)	第二部会員
	所属・職名	北海道大学医学研究院・教授
	所属委員会 (日本学術会議)	基礎医学委員会
	研究分野 (研究テーマ) ・セロトニン神経系の発達と機能障害に関する神経薬理学的研究 ・衝動性制御メカニズムに関する神経薬理学的研究 ・恐怖や不安発現に関わる神経回路の機能的分子基盤研究	

氏名	臼杵 勲 (うすき いさお)	連携会員
	所属・職名	札幌学院大学人文学部・教授
	所属委員会 (日本学術会議)	史学委員会
	研究分野 (研究テーマ) 考古学 (北東アジア地域の古代・中世都市・産業) 文化財科学 (年代測定・遺跡物理探査・文化財保護制度)	

氏名	宇山 智彦 (うやま ともひこ)	連携会員
	所属・職名	北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター・教授
	所属委員会 (日本学術会議)	地域研究委員会, 地域研究基盤強化分科会
	研究分野 (研究テーマ) ・中央ユーラシア地域研究・イスラーム地域研究 ・中央アジア近代史 (特にカザフスタン史, 知識人史) ・ロシア帝国史・比較帝国史・民族問題史 ・中央アジア現代政治を中心とする比較政治, 権威主義体制論 ・旧ソ連地域における国際関係と日本外交	

氏名	笹木 敬司 (ささき けいじ)	連携会員
	所属・職名	北海道大学電子科学研究所・教授
	所属委員会 (日本学術会議)	総合工学委員会
	研究分野 (研究テーマ) 応用物理学 (光工学・光量子科学) 光マニピュレーション, ナノフォトニクス, プラズモニクス 微小光共振器・ナノファイバ, ダイナミックナノ分光計測	

氏名	西村 正治 (にしむら まさはる)	連携会員
	所属・職名	北海道大学大学院医学研究院・特任教授, (H30.4～北海道大学名誉教授)
	所属委員会 (日本学術会議)	臨床医学委員会
	研究分野 (研究テーマ) 呼吸器病学全般, とくに喘息・COPDの病因・病態・治療 呼吸生理学・呼吸調節 肺高血圧	

氏名	本間 さと (ほんま さと)	連携会員
	所属・職名	北海道大学脳科学研究教育センター・客員教授, 慶愛会札幌花園病院睡眠医療センター・センター長
	所属委員会 (日本学術会議)	機能医科学分科会, IUPS分科会, 生物リズム分科会, 生命科学における公的研究資金のあり方検討分科会
	研究分野 (研究テーマ) 睡眠障害, 環境生理学, 時間生物学 (生体リズム・睡眠覚醒の研究), 神経科学 (視床下部・自律神経機能, 中枢時計機構の研究), 発光・蛍光イメージング	

氏名	美馬 のゆり (みま のゆり)	連携会員
	所属・職名	公立はこだて未来大学システム情報科学部・教授
	所属委員会 (日本学術会議)	情報学委員会
	研究分野 (研究テーマ) 学習環境デザイン 教育工学・情報教育・認知科学 科学コミュニケーション	

第24期地区会議構成員

第24期北海道地区会議構成員は会員および連携会員で構成されている。

[会 員]

石塚真由美	第二部会 (北海道大学大学院獣医学研究院 教授)
大野 由夏	第一部会 (北海道大学大学院経済学研究院 教授)
加藤 昌子	第三部会 (北海道大学大学院理学研究院 教授)
但野 茂	第三部会 ((独) 国立高等専門学校機構理事, 函館工業高等専門学校学 校長, 北海道大学名誉教授)
寶金 清博	第二部会 (北海道大学副学長, 病院

吉岡 充弘

長)

第二部会 (北海道大学大学院医学研究院長)

[連携会員]

石井 哲也	北海道大学安全衛生本部 教授
石田 晋	北海道大学大学院医学研究院 教授
上田 一郎	北海道大学名誉教授
臼杵 勲	札幌学院大学人文学部人間科学科 教授
宇山 智彦	北海道大学スラブ・ユーラシア研究 センター 教授
大場みち子	公立はこだて未来大学 教授
大場 雄介	北海道大学大学院医学研究院 教授
大貫 惣明	北海道大学名誉教授
笠井 久会	北海道大学大学院水産科学研究院

	准教授		授
蟹江 章	北海道大学大学院経済学研究院 教授	福井 学	北海道大学低温科学研究所 教授
河原純一郎	北海道大学文学研究科 准教授	藤田 修	北海道大学大学院工学研究院 教授
小柴 正則	北海道大学名誉教授	藤永 弘	札幌学院大学名誉教授
川村 周三	北海道大学大学院農学研究院 特任教授	船水 尚行	北海道大学大学院農学研究院 特任教授，総合地球環境学研究所 教授
櫻井 晃洋	札幌医科大学医学部 教授	古屋 正人	北海道大学大学院理学研究院 教授
笹木 敬司	北海道大学電子科学研究所 教授	本間 研一	北海道大学名誉教授
佐藤 典宏	北海道大学病院臨床研究開発センター長・教授	本間 さと	北海道大学脳科学研究教育センター客員教授
澤村 正也	北海道大学特別教授，大学院理学研究院 教授，安全衛生本部副本部長	三澤 弘明	北海道大学電子科学研究所 教授
鈴木 賢	明治大学法学部 教授，北海道大学名誉教授	湊 真一	北海道大学大学院情報科学研究科 教授
都木 靖彰	北海道大学大学院水産科学研究院 教授	南 雅文	北海道大学大学院薬学研究院 教授
田口 正樹	北海道大学大学院法学研究科 教授	美馬のゆり	公立はこだて未来大学 教授
武富 紹信	北海道大学大学院医学研究院 教授	村越 敬	北海道大学大学院理学研究院 教授
玉木 長良	北海道大学名誉教授	森本 淳子	北海道大学大学院農学研究院 准教授
玉腰 暁子	北海道大学大学院医学研究院 教授	安田 和則	医療法人知仁会八木整形外科病院名誉院長，北海道大学名誉教授
田村 豊	酪農学園大学獣医学群 教授	山口 佳三	北海道大学名誉教授
辻 康夫	北海道大学公共政策学連携研究部 教授	山下 啓子	北海道大学病院乳腺外科 教授
寺尾 宏明	北海道大学名誉教授	山下 竜一	北海道大学大学院法学研究科 教授
長里千香子	北海道大学北方生物圏フィールド科学センター 准教授	渡辺 雅彦	北海道大学大学院医学研究院 教授
名和 豊春	北海道大学総長		
西野 吉則	北海道大学電子科学研究所 教授		
西村 正治	北海道大学大学院医学研究院 特任教授		
庭山 聡美	室蘭工業大学大学院工学研究科 教授		
野口 伸	北海道大学大学院農学研究院 教授		
橋本 雄一	北海道大学大学院文学研究科 教授		
長谷山美紀	北海道大学大学院情報科学研究科 教授		
羽山 広文	北海道大学大学院工学研究院 教授		
樋田 京子	北海道大学遺伝子病制御研究所 特任准教授		
永見山幸夫	北海道教育大学名誉教授		
平野 高司	北海道大学大学院農学研究院 教授		
広田 知良	国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構北海道農業研究センターグループ長，北海道大学客員教		

(氏名は五十音順)

日本学術会議北海道地区会議事務局

北海道大学研究推進部研究振興企画課

〒060-0808 札幌市北区北8条西5丁目

電話 (011) 706-2155 FAX (011) 706-4873